

第5回研究会

シンポジウム「里山学から考える防災・減災 ～琵琶湖水域圏の保全・再生～」に向けた事前研究会

龍谷大学政策学部・准教授 里山学研究センター・研究員
清水万由子

完全防災から減災へ、公助一辺倒から自助・共助の重視へ、防災の考え方が大きく転換しつつある中で、近年では自然と災害の関係を捉えなおそうとする動きが出ている。

1つには、生態系を活用した防災・減災（Eco-DRR）の考え方が提唱されている。水害防備林や霞堤など自然生態系や地形を活かした伝統的な防災・減災策の見直しや、従来の土木工学にもとづく防災技術と生態系を活用した防災技術の組み合わせなども模索されている。

これとも関わるもう1つの論点として、里山の荒廃が災害の発生と激化を誘発している可能性の指摘である。土砂災害の発生原因の1つに森林生態系の変化があるとも言われ、里山保全と災害との間には深い関係があると考えられる。

本研究会では、このような問題意識のもと、シンポジウム「里山学から考える防災・減災～琵琶湖水域圏の保全・再生～」の登壇者2名による報告と参加者によるディスカッションを行い、里山学が今後の防災・減災の進展にどのような寄与が可能かを議論した。

なお、報告者2名及びその発表テーマは以下のとおりである。

- (1) 西田貴明氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社・副主任研究員）
「Eco-DRR（生態系を活用した防災減災）という考え方と国内外の動向」
- (2) 横田岳人氏（龍谷大学理工学部・准教授）
「奥山の自然は蝕まれている～ニホンジカによる荒廃は災害を誘発するのか？」